

《原著論文》

女子大学生における居場所感覚

——大学と家庭という心理的空間——

A Sense of Ibasho in Female Undergraduates :
Psychological Spaces of University and Home

岸 可奈子 諸 井 克 英*
(Kanakō KISHI) (Katsuhide MOROI)

Abstract : The present study examined the factor structure of various feeling about Ibasho (psychological space) in female undergraduates. Two kinds of Ibasho Feeling Scale (sixty items which were chosen from scale items used by previous studies) were administered to female undergraduates ($N=297$). Those scales measured Ibasho feeling in their university space and home space. The feeling about their university space consisted of five factors. In the feeling about their home spaces, three factors were extracted. Discriminant validity of two kinds of Ibasho feeling was examined. The significance of research in Ibasho was discussed from the point of view of students' enervation.

Key words : Ibasho, Psychological space, Adjustment

I. 問 題

藤竹(2000)は、それまでは断片的に論じられていた日常生活における居場所の問題を総合的に論じた。環境の抽象的な地理的特徴としての空間と、空間に象徴的な意味を与えたときに生じる場所を区別した居場所を次の3つに分類した。①社会的居場所〈自分が他人によって必要とされ、自分の資質や能力を社会的に発揮することができる〉、②人間的居場所〈自分であることをとり戻すことができ、安らぎを覚えたり、はっとすることのできる〉、③匿名の場所〈群衆の一員となり、匿名的な状況になると、今までの自分から抜け出せることから、かえって自分をとり戻すことができる〉。とりわけ、③の側面は、携帯電話機の「スマートフォン化」を迎えたわ

が国ではインターネットという居場所が今まで以上に日常的に場所機能を果たす可能性があることから有用な分類といえる。さらに、ある意味で人間の伝統的な営みである読書行動も居場所機能の③に包摂できる。幼児と絵本との関係を居場所の観点から論じた長谷川(2005)によれば、絵本読みにはイメージの力だけで別世界に想像上の自分を運んでいくことが必要とされ、絵本のイメージにそって自分も体ごとその絵本世界に入ろうとすると身体的疲労=飽きが生じる。

居場所感覚の測定を試みた先行諸研究で扱われている下位構成概念を概観した杉本(2009)によれば、個人に左右されずあらかじめ決定している場所の特徴である環境要因と、当該個人が居場所をどう捉えるかという主観的側面である感情要因に整理できる。杉本は感情要因を精神的安定、受容・共感・連帯感、肯定的感情・体験、他者排除という4要素に分類した。

ところで、わが国の大学進学率の上昇と対照的に、無気力で意欲がなく、物事に無感動、無関心で、無為な心

同志社女子大学大学院生活科学研究科
生活デザイン専攻

*同志社女子大学生生活科学部

理的状态すなわちアパシー症状を呈する大学生が顕在化し(稲村, 1989), スチューデント・アパシーという名称も今や一般化した。これは, 大学という生活領域における居場所に関わる問題といえる。一方で, 近年若者のひきこもりの常態化も指摘されている。齋藤(2003)によれば, 病名ではなく状態を示す言葉であるひきこもりは, 次の2つの特徴によって定義される。①6ヵ月以上自宅にひきこもって社会参加しない状態が続いている, ②他の精神障害がその第一の原因としては考えにくい。このひきこもりは家庭という居場所の問題として把握できよう。

本研究では, 臨床心理学あるいは臨床社会心理学の今や伝統的な研究対象となった無気力傾向の問題に居場所概念の観点を導入し, 無気力傾向の問題を当該個人が営む複数の生活領域全体から包括的に捉えるための基礎的作業を行う(石本, 2007; 石本・倉澤, 2009; 石本, 2010など)。女子大学生の無気力傾向の基本的構造を検討した諸井・嶋田・田中・清家・俣野(2009)や岸・諸井(2010)の研究では, 無気力傾向が次の3つに大別されることを見出した。①学生生活の本分ともいえる学業面での消極性を表す学業意欲の欠如, ②卒業後に関することや学業以外の対象への動機づけを示す大学外部での意欲, ③対人関係の不全や自己評価の低下を表す対人関係不全。笠原(1984)は, '70年代初頭から「高学歴青年」である大学生に顕在化した独特の「無気力反応」を精神医学の観点から解明したが, 「本業ともいべき生活部分(学生の場合なら学業)からの退却」と「本業以外の生活領域への参加」が独立していることに注目した。諸井らや岸・諸井の知見は, この笠原の指摘に対応しており, 大学内部での無気力傾向と大学外部での無気力傾向との相対的独立性を示唆する。

従来の居場所感覚研究では, 生活領域ごとの居場所感覚を測定したり(家庭・学校・地域; 齋藤, 2007; 齋藤・小野・社浦・守谷, 2008など), 対人関係ごとの測定が行われたりしている(家族, 友人, 恋人関係; 石本, 2008; 石本・倉澤, 2009など)。また, 学校場面での居心地のよい場所や悪い場所を特定させ, SD法で評定させている研究もある(渡辺・小高, 2006)。本研究では, 大学と家庭という2つの主要な生活領域を設定し, それぞれの領域での居場所感覚の測定を試みる。その上で, 2領域間の居場所感覚の関連を調べ, 居場所感覚の普遍性と特殊性を検討する。この目的のために, 女子大学生を対象とした質問紙調査を実施した。

II. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して, 質問紙調査を実施した(2010年12月13日)。回答にあたっては匿名性を保証し, 質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き, 以下の尺度に完全回答した女子学生297名を分析対象とした(1回生195名, 2回生21名, 3回生67名, 4回生14名)。回答者の平均年齢は19.49歳($SD = 1.16$, 18~23歳)であった。

質問紙の構成

質問紙は, 回答者の基本的属性に加え, ①大学における居場所感覚尺度, ②家庭における居場所感覚尺度から構成されている。なお, 2尺度の評定順の効果を相殺するために, ①と②の尺度の順番を入れ替えた2通りの質問紙を用意した(「大学先」144名, 「家庭先」153名)。

1. 居場所感覚の定義

本研究では, 特定の生活領域に対する態度や感情全体を居場所感覚と定義した。特定の生活領域の物理的側面や対人的側面の両方を含んでいる。ここでは, 回答者が通学している大学と回答者の家庭という2つの生活領域を設定した。

2. 大学における居場所感覚尺度

回答者の大学における居場所感覚を測定するために, 先行諸研究で使用された尺度項目を収集し, カテゴリーの検討を行った(堤, 2002; 則定, 2007; 杉本, 2009; 齋藤・小野・社浦・守谷, 2008; 石本, 2009)。「被受容感」, 「本来感」, 「自己有用感」, 「精神的安定」, 「行動の自由」, 「思考・内省」, 「対他的疎外感」, 「自己疎外感」の全8カテゴリーを設定した。項目を整理・統合し, 最終的に60項目に決定した。回答者が項目内容を理解しやすいように表現の洗練化を行い, 大学における居場所感覚尺度を作成した(Table 1-a, Appendix 1)。

「この6ヵ月間」の「大学」にいる時の自分自身の様子を思い浮かべさせ, 60項目それぞれがあてはまる程度を4点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

3. 家庭における居場所感覚尺度

家庭における居場所感を測定するために, 大学における居場所感覚尺度項目に対応させた60項目から成る尺度を作成した。大学における居場所感覚項目の「大学」と

いう表現を「家庭」に置き換えた場合に不適切な表現にならないように注意しながら、表現上の修正を行った (Table 1-b)。「この6ヵ月間」の「家庭」にいる時の自分自身の様子を思い浮かべさせ、60項目それぞれが、あてはまる程度を大学の場合と同様に4点尺度で評定させた。

なお、以上の2尺度それぞれでの評定順の効果を相殺するために、それぞれの尺度で評定用紙を頁単位 (6頁) で無作為に並び替えた。

Ⅲ. 結果

居場所感覚の基本的構造

まず、2つの尺度の項目水準での検討を行い、項目平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD > .60$) の

チェックをし、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象に因子分析 (主因子法 ($k=3$)) を行った。初期因子固有値 ≥ 1.00 を充たす解をすべて求め、適切な解を探索した。その際、①特定因子への負荷量が十分に大きく ($\geq |.40|$)、②他因子への負荷が小さい ($< |.40|$) という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ $|.40|$ 以上で負荷を示すように、項目を削除しながら、①と②の基準を充たすまで分析を反復した。明確な因子パターンが得られる解を採用した。因子分析の結果に基づいて、各因子への負荷量を基準に ($\geq |.40|$) に項目を選別し、下位尺度項目を構成した。下位尺度ごとに、1次元性の確認をし (①項目-全体相関分析、②主成分分析)、 α 係数も算出した。

Table 1-a 大学における居場所感覚尺度に関する因子分析 (主因子法, プロマックス回転 ($k=3$)) の結果一回転後の負荷量一

		当該因子負荷量				当該因子負荷量	
[I. 被受容感]		[III. 自己疎外感]					
uni_b_6	大学には、私と同じ考え方や価値観をもっている人がいる。	.79				x	.74
uni_b_10	大学には、私を大切にしてくれる人がいる。	.75					.68
uni_a_8	大学には、私の悩みを聞いてくれる人がいる。	.73					.64
uni_e_4	大学には、私と気持ちが通じ合う人がいる。	.67					.63
uni_d_8	大学には、私を受け入れてくれる人がいる。	.66					.63
uni_a_2	大学には、私を本当に理解してくれる人がいる。	.64				x	.63
uni_b_5	大学には、私の存在を認めてくれる人がいる。	.59					.61
uni_e_10	大学には、私のことを気にかけてくれる人がいる。	.57					.53
uni_d_4	大学では、私の考えや悩みを誰にも分かってもらえない感じがする。	-.55				x	.53
uni_b_4	大学にいて、誰かと一緒にいることができる。	.48				x	.44
[II. 精神的安定感]		[IV. 自己没入感]					
uni_e_1	大学にいて、私はくつろげる。	.87					-.69
uni_a_5	大学にいて、私はリラックスできる。	.80					.64
uni_c_3	大学にいて、私は安心できる。	.75				*	.63
uni_d_5	大学にいて、私はほっとできる。	.72					.62
uni_c_9	大学にいて、私は居心地がいい。	.72					-.61
uni_c_1	大学では、ありのままの私でいられる。	.60					-.55
uni_c_7	大学では、ありのままの私を出せる。	.60					.53
uni_e_8	大学にいて、私は安定した気持ちになる。	*	.60			*	.47
uni_b_1	大学にいて、私は幸せを感じる。	*	.47				.44
uni_c_10	大学では、私は心から泣いたり笑ったりできる。	.44				*	.44
uni_e_7	大学にいて、私は生き生きとできる。	*	.44				.43
uni_b_7	大学にいて、私は楽しくなる。	*	.43				
		[V. 自己有用感]					
		II	III	IV	V		
[因子相関]		I	.59	-.58	.39	.59	
		II		-.53	.52	.51	
		III			-.42	-.40	
		IV				.37	
uni_f_6	大学では、私のことを必要とする人がいる。					*	.72
uni_e_5	大学では、私は頼りにされている。					*	.71
uni_a_9	大学に私がいないと、困る人がいる。					*	.66
uni_d_9	大学では、私が支えとなっている人がいる。					*	.53
uni_c_6	大学では、誰かに役立つことができる。					*	.51

N = 297

初期固有値 > 1.37; 初期説明率 62.36%

*: 共通項目; x: 家庭における居場所感覚では「精神的安定感」

1. 大学における居場所感覚

項目水準での検討の結果、1項目が不適切であった。残りの59項目を対象に因子分析を行ったが、2~12因子解まで算出可能であった。項目内容と因子負荷のパターンを検討したところ5因子解が適切と判断された。最終的な因子解をTable 1-aに示す。

第I因子は、大学に自分を受け入れてくれる他者がいることを表す項目の負荷が高く、「被受容感」と命名した。第II因子は、大学だと本当の自分でいられる状態や安定した精神状態に関する項目で負荷が高いため、「精神的安定感」と名づけた。大学での孤独感や自己に向けられた否定的感覚を表す項目の負荷が高い第III因子は、「自己疎外感」とした。第IV因子は、大学の中で自己への注意の持続性に関する項目の負荷が高く、「自己没入感」と呼ぶことにした。大学での自分の必要性や有益性の感覚に関する項目に高い負荷を示した第V因子は、「自己有用感」とした。

2. 家庭における居場所感覚

項目水準での検討で不適切であった20項目を除く40項目を対象とした因子分析では2~12因子解が算出可能であった。項目内容と因子負荷のパターンを検討したところ3因子解が適切と判断され、最終的な因子解をTable 1-bに示す。第I因子は「精神的安定感」、第II因子は「自己有用感」、第III因子は「自己没入感」とそれぞ

れ命名された。

3. 各居場所感覚における下位尺度の検討

8つの下位尺度ごとに1次元性の検討したところ(Table 1-c)、家庭での自己没入感の α 係数が若干低かったが($\alpha = .66$; 項目-全体相関).39)、他は十分な値を示した。主成分分析での説明率も十分であった($\geq 48.22\%$)。各得点の分布の正規性も検討したが、すべて正規分布からの逸脱が認められた。しかし、 z 値がそれほど大きくないことから問題はないと判断した($z \leq 2.04$)。

次に下位尺度得点の比較を行った。大学では「被受容感」精神的安定感 \equiv 自己没入感)自己有用感)自己疎外感)、家庭では「精神的安定感 \equiv 自己没入感)自己有用感)」という傾向がそれぞれ認められた。

居場所感覚におよぼす生活条件の影響

2領域における居場所感覚に回答者の生活条件がどのような影響をおよぼすかを検討するために、分散分析を行った。ここでは、回答者の生活条件として、キャンパス(京田辺キャンパス対今出川キャンパス)、学年(1年生対2年生以上)、およびすまい(自宅生対非自宅生)を取り上げた。居場所感覚下位尺度得点(大学5得点、家庭3得点)それぞれを従属変数とし、キャンパス、学年、およびすまいを独立変数とする $2 \times 2 \times 2$ の分散分析を実施した。3つの主効果と4つの交互作用効果を算出した。これらの結果をTable 2に示す。

Table 1-b 家庭における居場所感覚尺度に関する因子分析(主因子法、プロマックス回転($k=3$))の結果一回転後の負荷量

		当該因子負荷量			当該因子負荷量
[精神的安定感]			[自己有用感]		
hom_d_2	家庭には、いたくないと思う。	-90	hom_f_6	家庭では、私のことを必要とする人がいる。	* .80
hom_e_3	家庭にいと、私はストレスを感じる。	x -85	hom_e_5	家庭では、私は頼りにされている。	* .77
hom_d_4	家庭では、私の考えや悩みを誰にも分かっ てもらえない感じがする。	-79	hom_a_9	家庭に私がいないと、困る人がいる。	* .74
hom_a_10	家庭では、私には共感できないことが多い。	-73	hom_c_6	家庭では、誰かに役立つことができる。	* .69
hom_c_2	家庭にいと、私は落ち込みがちになる。	x -70	hom_a_3	家庭に私がいないと、さびしがる人がいる。	.64
hom_c_8	家庭にいと、私はさびしくなる。	x -69	hom_d_9	家庭では、私が支えとなっている人がいる。	* .57
hom_f_7	家庭に、私は満足している。	.68	hom_f_2	家庭にいと、私はやりがいを感じる。	.52
hom_b_1	家庭にいと、私は幸せを感じる。	* .64	[自己没入感]		
hom_b_7	家庭にいと、私は楽しくなる。	* .63	hom_b_8	家庭では、私自身のことについて考えること ができる。	* .68
hom_a_4	家庭は、私にとって居心地が悪い。	-63	hom_c_4	家庭では、私は物思いにふけることができる。	.59
hom_e_8	家庭にいと、私は安定した気持ちになる。	* .63	hom_a_6	家庭では、私だけの時間がもてる。	* .50
hom_e_6	家庭では、私の思い通りにできないことが多い。	x -62	hom_b_2	家庭では、私は何かに夢中になれる。	* .48
hom_e_7	家庭にいと、私は生き生きとできる。	* .57			
hom_a_2	家庭には、私を本当に理解してくれる人がいる。	.57			
hom_e_2	家庭にいと、私は自分を見失わないでいられる。	.52			
hom_f_3	家庭にいと、私には得るものがないような 感じがする。	-50	[因子相関]		
				II	III
				I	.61 .55
				II	.50

N = 297

初期固有値 > 1.59; 初期説明率 56.88%

*: 共通項目; x: 大学における居場所感覚では「自己疎外感」

Table 1-c 大学および家庭における居場所感覚下位尺度得点の検討

	平均値(x)	標準偏差	正規性の検定(y)	信頼性係数(a)	第I主成分説明率(b)		
[大学における居場所感覚]							
被受容感	3.14	d	0.59	z = 1.79	b	$\alpha = .93$	61.32%
精神的安定感	2.75	c	0.69	z = 1.41	c	$\alpha = .96$	68.06%
自己疎外感	2.00	a	0.60	z = 1.49	c	$\alpha = .92$	54.30%
自己没入感	2.82	c	0.56	z = 1.57	c	$\alpha = .84$	48.22%
自己有用感	2.47	b	0.63	z = 1.66	b	$\alpha = .87$	65.59%
[反復測定分散分析] $F(2.01,594.48) = 164.63$ a							
[家庭における居場所感覚]							
精神的安定感	3.21	b	0.63	z = 2.04	a	$\alpha = .95$	55.71%
自己有用感	2.93	a	0.63	z = 1.61	b	$\alpha = .87$	56.55%
自己没入感	3.19	b	0.55	z = 1.81	b	$\alpha = .66$	49.77%
[反復測定分散分析] $F(1.93,571.66) = 41.09$ a							

N = 297

(x) 異なる英文字は互いに有意に異なる (Bonferroni の方法, $p < .001$), (y) Kolmogorov-Smirnov の検定

(a) Cronbach の α 係数, (b) 主成分分析における未回転第 I 主成分説明率

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

Table 2 大学および家庭における居場所感覚下位尺度得点に関する分散分析 (キャンパス×学年×すまい) の結果

—大学における居場所感覚—															
キャンパス	学年	すまい	N	被受容感		精神的安定感		自己疎外感		自己没入感		自己有用感			
				平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
京田辺	1年生	自宅生	68	3.08	0.61	2.69	0.66	2.07	0.61	2.68	0.53	2.42	0.60		
		非自宅生	43	3.14	0.46	2.67	0.58	2.06	0.53	2.77	0.50	2.46	0.47		
	2年生以上	自宅生	34	3.21	0.51	2.93	0.61	1.96	0.54	3.00	0.51	2.64	0.61		
		非自宅生	15	3.23	0.46	2.75	0.76	1.88	0.58	2.98	0.63	2.65	0.59		
今出川	1年生	自宅生	62	3.18	0.62	2.82	0.69	2.00	0.67	2.78	0.63	2.46	0.65		
		非自宅生	22	2.95	0.75	2.43	0.85	2.22	0.67	2.79	0.62	2.13	0.85		
	2年生以上	自宅生	31	3.18	0.69	2.88	0.79	1.82	0.51	2.93	0.59	2.57	0.70		
		非自宅生	22	3.16	0.52	2.71	0.64	1.83	0.62	2.98	0.41	2.45	0.54		
[分散分析]		すべて $df = 1/289$													
(主効果)		学年							$F = 7.37$ b		$F = 8.91$ b		$F = 6.67$ b		
		すまい					$F = 4.44$ c								
(交互作用効果)		キャンパス×学年, キャンパス×すまい, 学年×すまい, キャンパス×学年×すまい→すべて ns.													
				$R^2 = .02$		$R^2 = .03$		$R^2 = .03$		$R^2 = .04$		$R^2 = .04$			
—家庭における居場所感覚—															
キャンパス	学年	すまい	N	精神的安定感		自己有用感		自己没入感							
				平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差						
京田辺	1年生	自宅生	68	3.06	0.64	2.77	0.62	3.18	0.54						
		非自宅生	43	3.27	0.61	2.95	0.61	3.10	0.62						
	2年生以上	自宅生	34	3.24	0.60	3.08	0.53	3.32	0.48						
		非自宅生	15	3.25	0.77	3.19	0.65	3.23	0.59						
今出川	1年生	自宅生	62	3.21	0.66	2.92	0.70	3.20	0.51						
		非自宅生	22	3.31	0.60	2.86	0.72	3.09	0.74						
	2年生以上	自宅生	31	3.19	0.65	3.00	0.48	3.31	0.47						
		非自宅生	22	3.37	0.54	2.97	0.65	3.13	0.54						
[分散分析]		すべて $df = 1/289$													
(主効果)		学年					$F = 5.16$ c								
(交互作用効果)		キャンパス×学年, キャンパス×すまい, 学年×すまい, キャンパス×学年×すまい→すべて ns.													
				$R^2 = .02$		$R^2 = .03$		$R^2 = .02$							

大学における居場所感覚の結果を見ると、「自己疎外感」、「自己没入感」、「自己有用感」で有意な学年の主効果が認められた。「1年生」に比べ「2年生以上」のほうで、自己疎外感が低く、自己没入感や自己有用感が高い傾向があった。「精神的安定感」では有意なすまいの主効果が得られ、「非自宅生」よりも「自宅生」のほうが高い精神的安定感を見せた。

家庭における居場所感覚では、「自己有用感」での「学年」の主効果のみが有意であった。「1年生」に比べ「2年生以上」で自己有用感が高かった。

2つの生活領域での居場所感覚の関係

1. 2つの生活領域での居場所感覚の弁別性

本研究では、大学と家庭という2つの生活領域での居場所感覚でそれぞれ下位尺度得点が得られた。2領域における居場所感覚の独立性については次の2通りの予測が考えられる。①居場所感覚の性質による結びつきのほうが強い、②領域ごとの結びつきのほうが強い。①については、同じ心理学的状態を表している変数同士（例えば「大学における精神的安定感」と「家庭における精神的安定感」、「大学における自己没入感」と「家庭における自己没入感」など）の関連が強く、②の予測に従うと、大学あるいは家庭という独自の生活領域で居場所感覚のつながりが強く、大学における居場所感覚から成る因子と家庭における居場所感覚がまとまった因子が抽出されることになる。

①と②のどちらの傾向が強いかを検討するために、大学での居場所感覚下位尺度5得点および家庭での居場所感覚下位尺度3得点を対象とした因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。固有値1.00の基準で2因子が抽出された。この結果をTable 3-aに示す。

第I因子では大学における居場所感覚5得点、第II因子では家庭における居場所感覚3得点の負荷がそれぞれ高かった。つまり、生活領域を超えたまとまりは見られず、2つの生活領域でのまとまりが現れた。生活領域ごとの結びつきが強いという予測②が支持された。この結果は、本研究で設定した2つの生活領域の心理的弁別性を表している。

次に、「1年-自宅」、「1年-非自宅」、「2年-自宅」、「2年-非自宅」に回答者を分けて同様の因子分析を行ったが、それぞれの分析で大学における居場所感覚因子と家庭における居場所感覚因子の2因子が得られ、生活条件を考慮しても②の予測が支持されたことになる。しかし、各生活条件での因子間相関の大きさを見ると、「1年生」に比べ（自宅 .25, 非自宅 .19）「2年生以上」の

Table 3-a 大学と家庭における居場所感覚に関する因子分析（主因子法、プロマックス回転 ($k=3$)）の結果—回転後の負荷量—

	I	II
〔大学における居場所感覚〕		
精神的安定感	.94	-.09
被受容感	.85	.01
自己疎外感	-.77	.01
自己有用感	.72	.06
自己没入感	.58	.13
〔家庭における居場所感覚〕		
精神的安定感	-.06	.85
自己有用感	.10	.74
自己没入感	.03	.57
〔因子間相関〕		
		.30

$N = 297$

初期固有値 > 1.73 ; 初期説明率 68.72%

Table 3-b 大学と家庭における居場所感覚の関係—ピアソン相関値—

	〔家庭における居場所感覚〕		
	精神的安定感	自己有用感	自己没入感
〔大学における居場所感覚〕			
被受容感	.19 a	.26 a	.18 a
精神的安定感	.09	.23 a	.15 b
自己疎外感	-.21 a	-.21 a	-.10
自己没入感	.20 a	.31 a	.21 a
自己有用感	.14 c	.32 a	.20 a

$N = 297$

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

場合に（自宅 .39, 非自宅 .31）因子間相関が若干高かった。2年生以上になると、大学という生活空間での居場所感覚と家庭という生活空間での居場所感覚の区別が若干曖昧になると考えられる。

2. 2つの生活領域での居場所感覚間関係

大学での居場所感覚と家庭での居場所感覚との関連を見るために、下位尺度得点を用いて①ピアソン相関分析、②正準相関分析を行った。

ピアソン相関分析の結果をTable 3-bに表す。「家庭での精神的安定感」が高いと、「大学での被受容感」、「大学での自己没入感」、「大学での自己有用感」もそれぞれ高く、「大学での自己疎外感」は低いといえる。また、「家庭での自己有用感」の高さは、「大学での被受容感」、「大学での精神的安定感」、「大学での自己没入感」、および「大学での自己有用感」の高さと、また「大学での自己疎外感」の低さと有意に結びついている。最後

Table 3-c 家庭における居場所感覚と大学における居場所感覚との関係—正準相関分析—

	〈正準負荷量〉	
	第 I 軸	第 II 軸
〔家庭における居場所感覚〕		
精神的安定感	-0.45	-0.88
自己有用感	-0.93	-0.30
自己没入感	-0.63	-0.08
〔大学における居場所感覚〕		
被受容感	-0.65	-0.29
精神的安定感	-0.64	.10
自己疎外感	.42	.55
自己没入感	-0.79	-0.23
自己有用感	-0.86	.04
〔正準相関〕	.40	.29
$\chi^2 = 76.88$ $df = 15$ $p = .001$ $\chi^2 = 26.95$ $df = 8$ $p = .001$		

N = 297

に、「家庭での自己没入感」が高いと、「大学での被受容感」, 「大学での精神的安定感」, 「大学での自己没入感」, および「大学での自己有用感」も高いことが分かった。

大学での居場所感覚下位尺度 5 得点と家庭での居場所感覚下位尺度 3 得点を対象とした正準相関分析では, Table 3-c に示すように, 第 II 軸までの正準相関係数が有意であった。第 I 正準変量については, 「家庭での自己有用感」の高まりが「大学での自己没入感」や「大学での自己有用感」の促進と結びついていると解釈できる。第 II 正準変量は, 「家庭での精神的安定感」の高まりと「大学での自己疎外感」の抑制の結びつきを示している。

IV. 考 察

本研究では, 女子大学生を対象として大学と家庭という 2 つの主要生活領域での居場所感覚の基本的構造と 2 領域の相互関連の検討を行った。大学では 5 因子, 家庭では 3 因子が抽出され, 従来の研究で認められている居場所感覚の側面が現れた。大学よりも家庭のほうが抽出因子数が少なかったが, これは家庭での居場所感覚の単純さを示しているのではなく, 項目水準でのチェック段階で家庭における居場所感覚尺度項目が多く除去されたためである。2 つの尺度での対応項目を検討すると, 大学のほうが家庭よりも平均値が有意に高かった項目は 18 項目だったが, 大学のほうで家庭よりも平均値が有意に低かった項目は 35 項目あった。これは, 本研究の回答者の場合, 家庭の居心地が一般的によいと解釈でき

よう。

次に居場所感覚の下位尺度ごとに回答者の生活条件の影響を検討したが, すまいの有意な影響とともに学年進行の有意な影響も認められた。これは, ①大学生活への適応にとって自宅通学という形式が有利であり, ②学年進行という大学生活内での変化が家庭における居場所感覚に肯定的影響をもたらすという 2 つの領域間の相互影響を示している。①については大学新入生の適応に関する諸井 (1995) の知見と対応する。

しかしながら, 居場所感覚下位尺度 8 得点を対象とする 2 次因子分析の結果は, 同じ心理学的状態を表している変数同士の関連よりも, 大学あるいは家庭という独自の生活領域ごとのまとまりのほうが強いことを表し, 2 つの生活領域で生じる居場所感覚に弁別性があることになる。しかしながら, 興味深いことに, 学年進行とともにこの弁別性が若干曖昧になる。精神分析の観点から居場所概念を扱った北山 (2003) によれば, 居場所とは「自分が自分であるための環境」である。生活領域間での居場所感覚の弁別性と共通性の問題は, 自己概念を仲介概念として設定することにより明瞭になるかもしれない (例えば, 堤, 2002)。

ところで, 住田 (2003) は, 先行諸研究を検討し, ①関係性〈「他者との安定した共感的な関係の存在」対「他者との関係から切り離された孤立」〉と②空間性〈「他者との共有を目的としている場所」対「私的に自由に使用できる専有の場所」〉の 2 軸を交差させ, 次の居場所感覚の 4 類型を提起した。I 型〈他者との共感的な関係性が安定的に形成されている社会的な場所; 学校・地域での仲間集団など〉, II 型〈他者との共感的な関係が私的空間において形成; 自分の部屋での同輩友人との交流など〉, III 型〈他者との関係性から切り離されて孤立状態のままの私的空間; 自室での閉じこもりなど〉, IV 型〈他者との関係から切り離され, 孤立しているにもかかわらず社会的な場所にいる; ゲームセンターでひとりでの出入りなど〉。本研究では, あらかじめ生活領域を設定し居場所感覚を測定したが, 住田が提起したこのような類型に従って, 居場所感覚を測定することも興味深い作業である。つまり, 生活領域全体としてこのような 4 類型それぞれに対応する居場所を抱えているのか, 4 類型のうちのいずれかに居場所を求めていくのかなど, 検討すべき課題がある。

また, 本研究も含め従来の研究では質問紙形式によって居場所感覚の測定が行われているが, 例えば, 寺本 (2003) は写真投影法を用いて中学生の居場所を検討し

た。大学での居場所が具体的にどのような空間なのかを写真投影法によって明らかにする作業も重要である。いずれにせよ、本研究で明らかになった諸知見も含め、無気力傾向に関する従来の研究枠組みの拡大を意図した居場所感覚研究に今後も取り組むべきであろう。

〈付記〉

(1) 本報告で分析対象としたデータは、第1著者の岸可奈子が修士論文研究のために第2著者の下で立案・収集した研究の一部である。

(2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 19.0.0.1 for Windows を利用した。

V. 引用文献

藤竹 暁 2000 居場所を考える 藤竹暁(編)『現代人の居場所〈現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ3〉』至文堂 pp.47-57.

長谷川 稔子 2005 絵本の中の子どもの居場所-体の解放から想像力の解放へ-杉山千佳(編)『子どものいる場所〈現代のエスプリ No.457〉』至文堂 pp.73-80.

稲村 博 1989 『若者・アパシーの時代-急増する無気力とその背景-』日本放送出版協会

石本雄真 2008 居場所感に関連する大学生の生活の一側面 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2(1), 1-6.

石本雄真 2009 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1), 93-100.

石本雄真 2010 青年期の居場所が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21(3), 278-286.

石本雄真・倉澤知子 2009 心の居場所と大学生のアパシー傾向との関連 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2), 11-16.

岸可奈子・諸井克英 2010 無気力傾向尺度の再検討 同志社女子大学生生活科学 44, 1-5.

北山 修 1993 『自分と居場所』岩崎学術出版社

諸井克英 1995 『孤独感に関する社会心理学的研究 -原因帰属および対処方略との関係を中心として-』風間書房

諸井克英・嶋田若奈・田中康子・清家奈々・俣野由起子 2009 女子大学生の職業未決定傾向-大学生生活への意欲との関連- 同志社女子大学生生活科学, 43, 1-10.

則定百合子 2007 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集 49, 337

斎藤富由起 2007 大学生および高校生における心理的居場所感尺度作成の試み 千里金蘭大学紀要(生活科学部・人間社会学部) 4, 73-84.

斎藤富由起・小野淳・社浦竜太・守谷賢二 2008 高校生における居場所感と自己肯定感および無効化環境体験との関連性 千里金蘭大学紀要(生活科学部・人間社会学部) 5, 69-81.

斎藤 環 2003 『ひきこもり文化論』紀伊國屋書店

杉本希映 2009 『中学生の「居場所環境」における心理的機能に関する研究』風間書房

住田正樹 2003 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南博文(編)『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会 pp.3-17.

寺本 潔 2003 子ども居場所の地理学的分析 住田正樹・南博文(編)『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会 pp.249-267.

堤 雅雄 2002 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要 36, 1-7.

渡辺弥生・小高佐友里 2006 高校生における「居場所」としての学校の認知について 法政大学文学部紀要 53, 1-15.

(2011年11月9日受理)

Appendix 1 大学における居場所感覚尺度における残余項目

- uni_a_1 大学では、私自身のプライバシーが守られていない感じがする。
uni_a_3 大学に私がいないと、さびしがる人がある。
uni_a_4 大学は、私にとって居心地が悪い。
uni_a_10 大学では、私には共感できないことが多い。
uni_b_3 大学では、私はまわりの人から必要とされていないような気がする。
uni_b_9 大学にいと、私は無視されている感じがする。
uni_c_4 大学では、私は物思いにふけることができる。
uni_d_2 大学には、いたくないと思う。
uni_d_3 大学には、私が役割を背負わされているものがある。
uni_d_6 大学にいと、私は自分自身を実感できる。
uni_e_2 大学にいと、私は自分を見失わないでいられる。
uni_e_9 大学にいても、私は何をしてもよいか分からない。
uni_f_7 大学に、私は満足している。
uni_f_9 大学では、私は自由な感じがする。
-